

# 白菜頭部結束機の開発、官民一体で

## 群馬でデモンストレーション

### 全漬連浅漬・キムチ委員会

全漬連の浅漬・キムチ委員会（担当副会長・大羽恭史氏、秋本薫委員長）では10月25日、群馬県中之条町において、電動白菜頭部結束機のデモンストレーション、ならびに会議を開催した。

これは、漬物業界における圧倒的な需要量がある白菜において、生産農家の高齢化はもとより、結束作業が極めて重労働で、敬遠される傾向が一段と高まってきているなか、何とかこの作業を軽

減させて、白菜原料の安定確保を図ろうという目的で開催されたもの。さらに白菜頭部を結束することによって、冬季白菜を霜害や冷害から守り品質が長く保たれることから、一気に全量を収穫しなくても、計画的に原料白菜を活用・出荷調整できるメリットもある。

当日、漬物業界からは、東海漬物㈱、㈱アキモ、関口漬物食品㈱、㈱深町食品が出席。行政サイドからは国立研究開発法人

農業・食品産業技術総合研究機構、埼玉県産業技術総合センター北部研究所、さらに機械製造の東洋精機㈱、そして原料サイドからは南茨城白菜栽培組合など、官民合わせたの本格的な取組みとなった。

電動頭部結束機のデモンストレーションは、中之条町の山口農園で実施。あいにくの雨だったが、実演による作業効率のよさをつぶさに見るこ



会議の様子



出席者で記念撮影

テック文化会館に移動し、感想や今後の課題などについて真剣に話し合った。全漬連大羽担当副会長と秋本委員長が、白菜頭部結束機の必要性と期待のほどを述べ、開発経緯や行政支援状況も説明され、質疑応答もあった。

2017年12月に東海漬物㈱、東洋精機㈱、農研機構が埼玉県において全体構想を打ち合わせて以来、デモンストレーション

に使用した機械は第3号試作機械となる。製品販売価格の決定を始め、標準機の仕様、

どのような形で生産農家サイドに普及させていくかさまざまな課題はあるにせよ、2020年以内に販売を目指していくこととなった。とりわけ県ごとに栽培様式が異なり1

条植えと2条植えがあり、畝の高さに違いがあることなど（場合によっては機械に合わせた栽培方法の必要性）、1台の機械でどう運用効率を高めていくかも課題となる。

なお、広い畑では電動白菜頭部結束機を用い、比較的狭い畑においては、簡易式の「縛りん棒」の活用も促されていた。

いずれにしても従来の人手による頭部結束は1個当たり15秒くらいかかる、一反歩当たり約3000個の白菜が植え付けられているため、作業は至難の技となっている。

原料が安定的に確保できなければ、漬物業界にとって、今後大きな問題になってくるとあって、参加者全員高い関心をもって会議に臨んでいた。



結束状況を確認する大羽副会長（左）と秋本委員長

2019.10.25 食品経済新聞



電動白菜結束機のデモンストレーション